

沖縄県伊是名島

14人の高校生が見た伊是名

であいフォトエッセイカフェプログラム

TJF では、2005 年 11 月に高校生交流プログラムを実施しました。このプログラムは、海外から招聘した 7 人の高校生が、日本の高校生 7 人と一しょに沖縄県伊是名島でフォトエッセイをつくり、東京でのホームステイなどを通じて交流を図るというものでした。

TJF では、「であいフォトエッセイカフェ」をホームページに開設し、日本語の授業で写真教材「であい」*を使ったことのある高校生を対象に、2004 年 10 月から 2005 年 5 月にかけてフォトエッセイを募集しました。その結果、中国、韓国、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリスなどから 157 人の生徒がフォトエッセイを寄せてくれました。TJF が選んだ日本の高校生 7 人が、フォトエッセイを一つずつ読み、自分たちが会いたいと思う高校生 7 人を選びました。この 7 人が上述の海外から招聘した生徒です。この 7 人と日本の高校生 7 人は、「であい」の主人公の 1 人である玉城俊一さんの出身地、沖縄県伊是名島に 4 日間滞在しました。滞在中、14 人は、玉城俊一さん、村長さん、版画家の名嘉睦穂さんなどいろいろな人から話を聞きました。そして、14 人は 3 つのグループに分かれ、各グループでテーマを決め、自分たちでさらに取材をし、写真と文章でまとめたことを発表するという協同作業に取り組みました。

今号では、この 3 つの発表を通して、沖縄県伊是名島の一面を紹介します。詳細は、<http://www.tjf.or.jp/photoessaycafe/index.html> 参照ください。

(注) ●「今日日本」2-4 の内容は、各チームが発表したものに編集を加えたものです。
● であい：TJF が 2002 年に制作した写真教材。7 人の高校生を文章と写真などで紹介したもの。『ひだまり』第 10～18 号で 7 人を取り上げた授業案を紹介しました。

メンバー紹介

グループ A：こうちゃん（神奈川県立外語短大付属高校 2 年）、みさ（横浜市立横浜商業高校 1 年）、白ゆん（吉林省長春朝鮮族中学高等部 3 年）、アビー（オーストラリアヴィクトリア州ダンデンノン高校 2 年）

グループ B：けんすけ（横浜市立横浜商業高校 2 年）、はり（東洋英和女学院高等部 2 年）、ポール（アメリカネバダ州ネバダ大学 1 年）、ロージー（イギリスシェフィールドキングエドワードVII スクール 3 年）

グループ C：きんちゃん（神奈川県立外語短大付属高校 2 年）、コス（韓国済州道細花女子高校 2 年）、まや（東京農業大学第一高校 3 年）、みっきー（横浜市立横浜商業高校 1 年）、モリー（アメリカウィスコンシン州メナーシャ高校 3 年）、ウィッキー（ニュージーランドレヴィン市ホロウェヌア高校 1 年）

* メンバーの名前はニックネーム。学校、学年はプログラム実施当時のもの。



《ひだまり》では、現代の日本の文化・社会事情を写真と文章で紹介する「今日日本」と、「今日日本」を題材にした授業案を掲載します。



伊是名島は、沖縄本島の北西に位置していて、沖縄本島からはフェリーで 1 時間ほどのところにある。

沖縄県

沖縄県は、日本の最南端、最西端に位置し、大小 160 の島々で構成されている。有人島約 50 のうちでもっとも大きな島は、県庁所在地・那覇市がある沖縄本島。人口は 136 万人。亜熱帯海洋性気候に属しているため、真冬でも暖かく、年間の平均気温は 22.6 度。沖縄で最も重要な産業は観光業で、2003 年は 1 年間で 508 万人の観光客が訪れた。

歴史的には、1429 年から、明治政府が沖縄県を設置する 1879 年までの 450 年間、沖縄県には琉球王国が存続した。14 世紀から 16 世紀にかけて、地理的条件をいかして中国や東南アジア諸国との交易を盛んに行っていた。そのため、沖縄ではこれらの国々の影響を受けて、独特の文化が発達した。

伊是名島

伊是名島には、3,000 年以上前から人が住んでいたといわれ、その時代の石でできた斧や包丁、そして人骨や土器などがたくさん発見されている。1470 年に琉球王国の王に即位した尚門王はこの島で生まれたので、尚門王ゆかりの文化財が多く残されている。

島の総面積は 15.42k m²、周囲 16km、人口 1,860 人。学校は小学校・中学校それぞれ 1 校ずつあり、小学校の児童が 151 人、中学校の生徒が 71 人で、一学級の平均 25 人程度の小規模校。島に高校はない。

伊是名島のおもな産業は、農業、漁業、商工業。観光業にも力を入れている。2003 年に「伊是名村観光立村」を宣言し、初代の観光大使として伊是名島出身の名嘉睦穂さんを任命。観光業を進めるにあたっては、島の自然環境を守ることが大切なことから、日本で初めての伊是名村環境協力税（村に入ってくる人から 1 回につき 100 円を徴収する）を始めた。

永遠の家

永遠の家と聞いて、何をイメージしますか。この永遠の家というのはお墓のことです。なぜお墓に興味を持ったかという、名嘉睦穂さんがお話をしてくれたときに、お墓にまつわる文化が私たちが住んでいるところのものと大きく違っていたからです。まず、お墓の形が大きく違っています(写真1)。沖縄では、お墓を亡くなった人が住む家だと考えているので、とても頑丈にできています。またモチーフに女性の子宮が形どられています(写真2)。ヒンプン(写真3)は風を防いだり邪気が入らないようにするためのものとして入り口に立てられているそうです。私たちがおもしろく



写真5

感じたのは、ウートー^トーということばです。神様や仏様を呼ぶためのことばで、シーミー^ののときなどに唱えます。シーミーでは、ご馳走を作って供えますが、それは亡くなった人がもう1つの世界で生きていて普通に生活していると考えられているからではないかと思いました。テールさんのおじさんやおばさんの話からも、こういう考えをもとに、いろいろな行動がされているのだと

思いました。たとえば、シーミーのときに13枚のウチカビ^{**}(写真5)を燃やして供えますが、この行動ももう1つの世界で亡くなった人が生きていう考えがあるためだと感じました。仏壇で印象に残ったのは、真ん中にある赤い位牌(写真4)の決まりのようなものです。位牌は33回忌が過ぎると、裏返しにされます。それは、死後33年が経つとその人は神になるという考えからです。これらは私たち4人にとってはじめて聞く話で、環境が違えば考え方も大きく変わるということ強く感じました。沖縄の昔からの考えでは亡くなった人はそこで終わりではなく、次の世界へ進むひとつの過程を死ぬということ越えたと考えられているようですが、私たち4人も育った環境が違うので、4種類の考え方がありました。

こうちゃん: ぼくの考えは、死んでしまえば何も感じず、何も考えないように、つまり、何もなくなり、まったくの無になってしまうと考えていました。

みさ: 私の考えは、私も小さいころは、沖縄の人たちのように、自分が死んでしまってもまた違う世界で生きられると思っていました。しかし、気がつくこの気持ちは自然なくなっていました。この取材を通して、いろいろな方たちのお話を伺って、やっぱり沖縄のような考え方は私はすてきなと感じました。

アビー: 私は人は死んでしまったらそこで終わりという考え方をします。でも沖縄の人たちの死ぬことは終わりではないという考え方はとてもよいと思います。

白ゆん: 人が死ぬのは疲れる人生からの解放だと思っています。すべての人が、しなければならぬことがたくさんあって、毎日苦勞の連続だからです。

このように、一人一人大きく違いがあるのはとても興味深いことです。

*シーミー: 3月始め頃に行われる祖先供養の行事。その日は、一族がご馳走を持って集まり、墓にご馳走を供え、盛大に宴を開く。もともと中国から伝わった。

**ウチカビ: 黄色い紙銭のことで、祖先があのお世で使うお金とされている。もともと中国から伝わった。シーミーやお盆など祖先を供養する行事のときにウチカビを燃やす。



写真1



写真2



写真3



写真4

こんな話を聞きました

●このお墓(写真1)は、亀の甲羅の形をしているから亀甲墓といえます。沖縄では、今の世界と同じように次の世界で家族がいっしょに生活するという考え方があります。死んだら終わりじゃなくて、次の別の世界に移動していくんです。次の世界に行くという考えがある一方で、女性の子宮にかたどられているのは、死んだら子宮を通してまたもとの位置に戻るという考えに基づいているんです。それから、家と同じようにお墓にもヒンプン*が作られています。(名嘉睦穂さん)

●沖縄では普通の家よりもお墓のほうが大事といわれています。お墓にお金をかけてきれいにする人が多い。今の家は仮の家で、お墓はずっと自分の家だから、大きく作る。死んだあとの世界でも家族もいて、仕事もして、普通に暮らしていると思う。(商店のおばさん)

*門の内側に作られた仕切り扉のこと。中国にある屏風面が沖縄に伝わったとされる。

関連情報

日本本島でよく見られるお墓は、沖縄で見られるお墓に比べて小さく、墓地も狭いです。墓地の平均的な広さは3平方メートルほどです。都心部ではもっと狭い墓地もあり、東京都内の公営墓地では、0.5平方メートルのものもあります。また、墓石の形は宗教や宗派によって異なりますが、よく見られるのは写真のように、和型といって、角石が数段、積み上げられています。その手前には、水鉢、線香立てがおさめられる石があり、両脇に花立てがあります。最近では、洋型といって、奥行きが薄く、横に長い墓石も増えてきたようです。また、将棋の駒や野球のボールなど故人の仕事や趣味にちなんだ形のお墓を作ることもあります。



伊是名島を美しく

伊是名島は美しい砂浜と豊かな自然をもち、住みやすく訪れるのにとっても良いところです。東京、横浜、イギリス、アメリカから来た私たちにとって、伊是名島の美しい海はととても新鮮で感動的でした(写真1)。



写真5

ロージー: イギリスではどのスーパーマーケットにもリサイクリングセンターという場所があります。そして私の町では家族ごとに紙をリサイクルするための回収ボックスを持っています。

ポール: アメリカではゴミのポイ捨てをすると、罰金を払わなくてはなりません。

私たちはゴミ拾いに出かけました(写真5)しかし、そこには拾いきれない量のゴミがありました。私たちは拾ったゴミを指定のゴミ袋に分別していきました。この写真の村の指定のゴミ袋(写真6)の収益は、村のゴミ処理にかかる費用に当てられています。約1時間で私たちが集めたゴミはプラスチックやペットボトルを含め7つのゴミ袋がいっぱいになりました(写真7)。みんなでいっしょにゴミ問題を解決することで、この伊是名島はもっと美しい島になるでしょう。



写真6

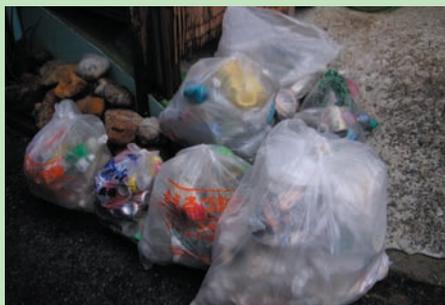


写真7



写真1

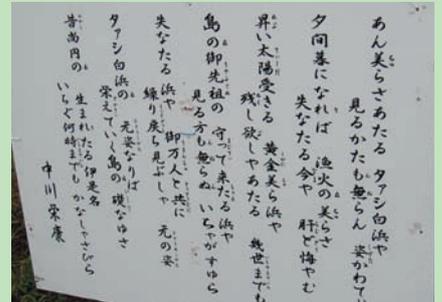


写真2



写真3



写真4

こんな話を聞きました

●高校生の頃、島のきれいな自然が失われていくのにショックを受けました。島がだんだん変わっていくのが寂しくて、何かを残しておきたいと思って「愛する島」という曲を作りました。自然が失われていく背景にはとても難しい問題があります。この島で暮らしていくためには何か仕事をやらなくちゃいけない。その一つが土木業です。仕事を作るために、新しくどんどん開発しなくちゃいけない。それから、地球の温暖化の影響で海水の温度が上がって、サンゴとか海の生物が死んでしまったりしているんです。(玉城俊一さん)

●数年前に、ダイオキシン防止のために焼却炉の基準が厳しくなったことで、それまで使用していた村内の焼却炉が使用できなくなりました。そこで、現在は、年間1,000万円かけてゴミを沖縄本島まで持って行って、焼却しています。基準を満たした焼却炉を建設するには8億円かかります。また、島には漂着ゴミも多いです。島の観光資源である海岸の砂浜をきれいにするために、環境協働税を導入して、その税収で砂浜の清掃を行っています。(役場の課長さん)

関連情報

ゴミの処理は地方自治体が行っているのですが、住んでいるところによってゴミの出し方が異なります。東京新宿区では、燃やすゴミ、燃やさないゴミ、資源ゴミに分別してゴミを出します。さらに、資源ゴミは、スチール缶、アルミ缶、瓶、ダンボール、新聞・雑誌、ペットボトルなどに分別します。発砲スチロールトレイや牛乳パックなどは洗ってスーパーマーケットの店頭で置かれている回収ボックスに持っていきます。家具などの粗大ゴミは、予め連絡して有料で回収してもらえます。コンピュータや冷蔵庫はその家電を売った店が処理することになっています。最近では、燃やすゴミの収集も有料化する自治体が増えてきました。ゴミを細かく分別したり、有料にしたりする背景には、ゴミ問題があります。日本で一日に家庭から排出されるゴミの量は、5,160万トン。1日に1人が約1.1キログラムのゴミを出していることになるのです。膨大なゴミの処理には膨大なコストがかかるばかりでなく、ゴミの埋立地もなくなってきています。さらに、ゴミを燃やすと大量の二酸化炭素が発生し、地球の温暖化にもつながります。そこで、分別を細かくし、再利用したりリサイクルしたりしているのです。今、3つのR、Reduce, Reuse, Recycle (削減、再利用、リサイクル)が提唱されています。例えば、Reduce (削減)は、買い物をするときには自分のバッグを使って新たに袋をもらわないようにするなどごみになるものを減らすこと、Reuse (再利用)は壊れたからすぐに捨てるのではなく修理して使うなどものを再利用することのことをいいます。Recycleはものを別なものにかえることです。例えば、生ごみから堆肥をつくったり、ペットボトルから服を作ったりすること、また、そのようにするために、資源物をきちんと分別したりすることなどです。

音楽の力



写真1

私たちは島を訪れた初日に尚円太鼓の演奏を聞き、次の日に自分たちで演奏してみても(写真1)、音楽が持つ力を強く感じたので、もっと詳しく調べてみたいと思い、さまざまな人たちにインタビューしてみました。最初にとしかずさん(写真2)にインタビューしました。彼は尚円王に興味があり、太鼓をはじめました。彼の家族も尚円太鼓のメンバーです。としかずさんは、太鼓をやっているときは、家族を家族としてではなく仲間だと思っています。



写真5

としかずさんの奥さん、すみこさん(写真3)も太鼓をやっています。すみこさんは家事とケーキ屋さんの仕事で忙しいですが、太鼓をやっているときは充実した時間を過ごしているそうです。彼女は太鼓を音楽ではなくスポーツだと思っています。音楽には人と人をつなぐ力があると思っているそうです。

としかずさんとすみこさんの息子さん、ゆうたろうくん(写真4)も太鼓のメンバーです。太鼓をやめたいと思ったことは一度もなく、いつもやっていて楽しいと思っているということです。ゆうたろうくんはできればずっと太鼓を続けたいと思っています。

玉城俊一さん(写真5)は、シンガーソングライターでもあり、尚円太鼓のメンバーとしても活躍しています。彼にとって音楽は本当の自分を出すことができる貴重な場です。彼は昨日より今日、今日より明日というように、少しずつでも成長していきたいと思っているそうです。音楽に出会って、人生が大きく変わったと話してくれました。自分の今までの経験を生かして曲作りをしています。



写真6

テールさん(写真6)は、ギタリストであり、尚円太鼓の大太鼓担当でもあります。彼はお金を儲けるためではなく、自分の生きがいとして音楽をやっているそうです。恋をしたことで音楽観が変わったと言います。もし音楽をやっていなかったら、ほかにもっと好きなことができたかもしれないと思ったこともあるそうです。しかし今では音楽がない人生は考えられないと思っています。

尚円太鼓のメンバーはとても仲がよく、まるで一つの家族のような関係です。困ったことがあれば、お互いに相談しあえる仲です。彼らは音楽を通じて知り合いました。彼らを見ていると音楽は年齢、性別を超えて人の心と心をつなげる力があると感じます。インタビューをしたのは短い時間でしたが、私たちが彼らの家族になったかのように、彼らは温かく接してくれました。伊是名島の人々に出会って、音楽の持つ力を強く感じました。音楽は国境も超える力を持っていると思います。



写真2



写真3



写真4

こんな話を聞きました

- 尚円太鼓は1988年に結成されました。村の行事に出演したり、いろいろなイベントを企画して、多くの人に島のことを知ってもらって、伊是名を観光客でいっぱいにするのが私の仕事です。(尚円太鼓会長、としかずさん)
- 尚円太鼓が結成された当時から活動しています。これまで太鼓をやってきたと思うのは、一番大事な人は人との出会いだということです。(副会長、よしあきさん)
- 高校を卒業してから太鼓をやっています。ほかにはロックバンドでも活動しています。ぼくにとって音楽は生活の一部で、音楽があるからどんなつらいことがあってもやっていける感じです。ロックだけじゃなく、フォークとかもやりながら、みんなと楽しくやっていきたいです。島にいた間は、後輩たちが音楽をきっかけにいろんな道を開いていけるようにしてあげられたらいいなと思っています。(テールさん)
- 沖縄県立芸術大学では琉球古典音楽を専攻しました。古典音楽をやっていると、歌詞から沖縄の昔の人たちの考え方を学べます。すごく影響を受けた古典音楽の歌詞があります。それは、「きれいな花は、寒い寒い冬を越してからじゃないとそのきれいな花を咲かすことはできない」という歌詞です。挫折を感じたときに、すごく感動したし、励まされたんです。人は、大切なものは変わらないんだと思います。そういったことを歌を通じて知ることができるのはすごくいいですね。(玉城俊一さん)

関連情報

和太鼓

日本の太鼓を総称して和太鼓といいます。和太鼓の多くは、木でできた胴の両面に皮がはられています。木をくり抜いて作られたくり抜き太鼓や板を張り合わせて胴が作られた桶胴太鼓などがあります。直径が90cmぐらいのくり抜き太鼓だと、重量が100kg以上になります。桶胴太鼓はさまざまな大きさのものがあり、小さいものだと首からかけて踊りながら叩くこともあります。大きいものだと、直径が4mあるものもあります。いろいろな地域に太鼓グループがあるなど、子どもから大人まで年齢を問わず人気があります。毎年開かれる全国大会もあります。

琉球古典音楽

琉球王国時代に誕生した音楽のことです。三線、箏、胡弓、太鼓などの楽器が使われますが、その中で大きな役割を果たすのが三線です。三線は、三本の弦が張られた撥弦楽器で、16世紀ごろ中国から伝わってきました。琉球古典音楽は、中国からの使者を迎えるための歓迎宴や祝宴などで演奏され、舞踊と結びついて発展しました。また、音楽に琉歌(沖縄の方言で作られた、音数8・8・8・6の短詩)を取り込み、沖縄の人々の心が表現されました。琉球王国が消滅した後、三線音楽は庶民の間に広がり、芝居や歌劇などと結びつくと共に、人々の生活に根づきました。第二次世界大戦後、三線を求め、人々は空き缶を使って作ったカンカラ三線で音楽を奏で、心の傷を癒しました。独自の音階(ド・ミ・ファ・ソ・シ・ド)をもつ沖縄音楽には、多くのファンがいます。参考: <http://www.wonder-okinawa.jp/>